



全裸!

ADULT ONLY

Ver.9  
K. MUTOH



Keiji Mutoh  
ASTRAL BOUT  
Ver. 9

——甘い！ 先ほどのデザート、  
白玉あんみつチョコ饅頭なみに甘い！  
そのような考えだからこそ、  
キャスターなどというド外道に誑かされたあげく、  
アーチャーのような性根の捻じれ曲がった野郎に罵倒されるのです！





.....  
 家に帰る前に大層に  
 泣いてたから  
 泣いてるのよ

泣いてるのよ  
 泣いてるのよ

とっせん  
 ぶっせん

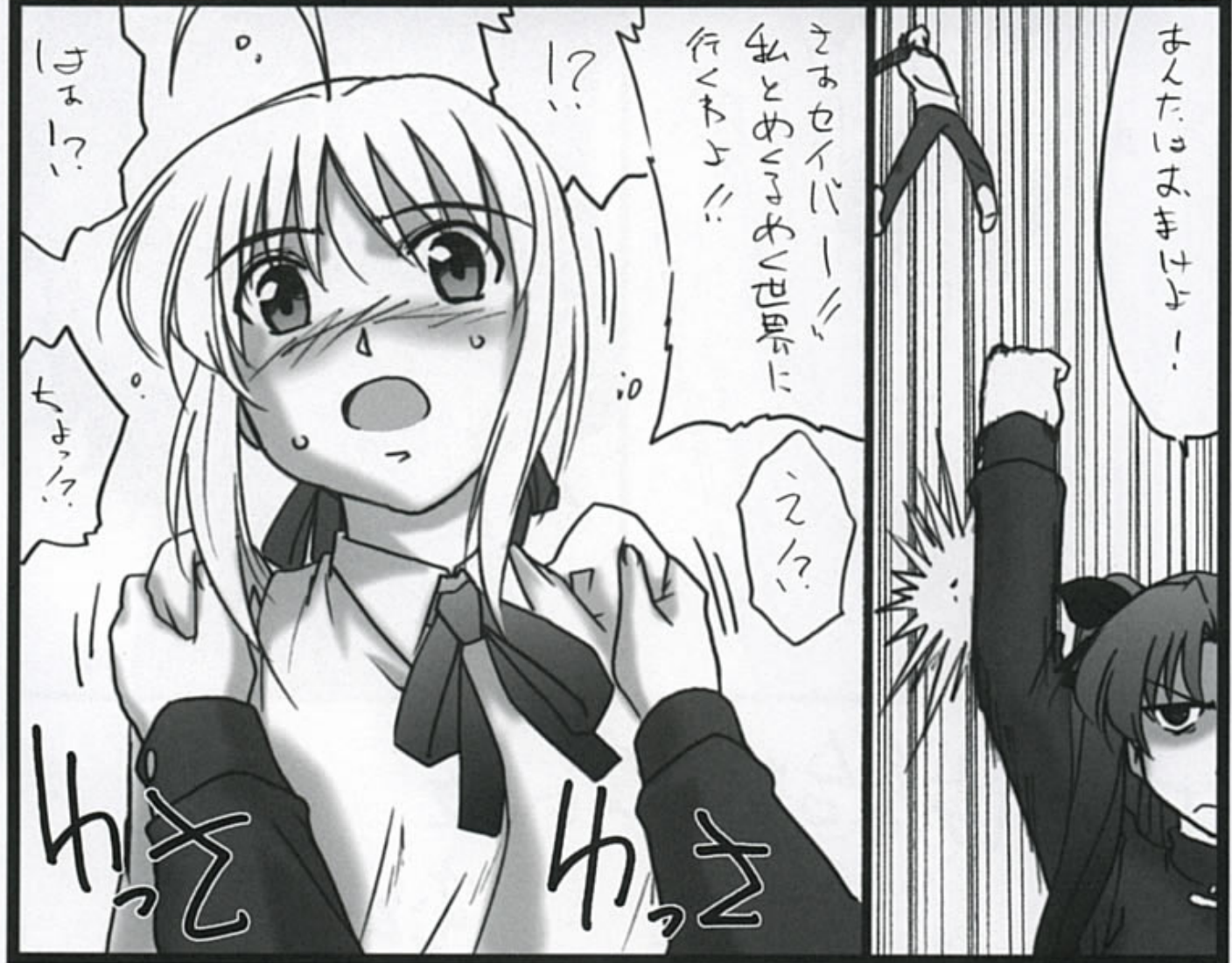
泣か供給のーいん!!

泣か供給大会のま  
 むらけい



そらに多くの「反力」を供給するわけだ！  
「カーン」も「ピン」といふ「カーン」  
「N-N-N-V-S-S-A...」

俺の「反力」も  
供給したいぞ！



あなたにはまはけよー！

さあセイバー！！  
私とあなたを「中絶」に  
行くぞよ！！

えん？

はまら？

たまら？

はっ

はっ



セイバー♡  
私のこぼのくんで♡

……♡  
……♡

……♡

……♡

……♡

……♡  
……♡

……♡

……♡

……♡  
……♡





あまの——  
遠坂……？



ん——？  
十路をアハハハ♡

ん、ち、か、め、と  
リ、原……

か、顔、を、な、め、の、さ、ら、し、ま、さ、す、な、さ、い、

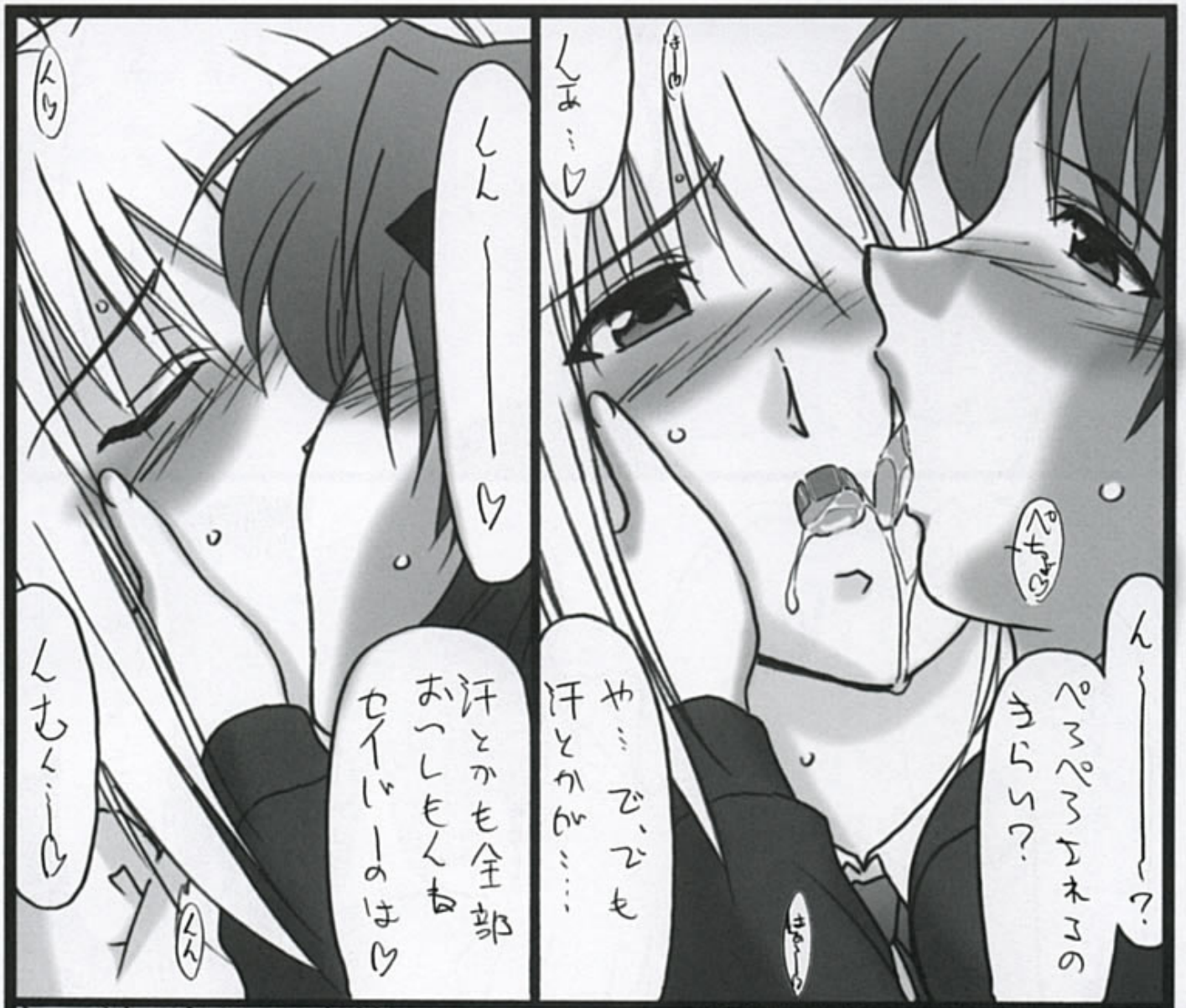
アハハ——♡  
私か味もス〜ン  
からアハハ♡  
おんこ〜ン回〜ン♡

あ——

あ——

ん……



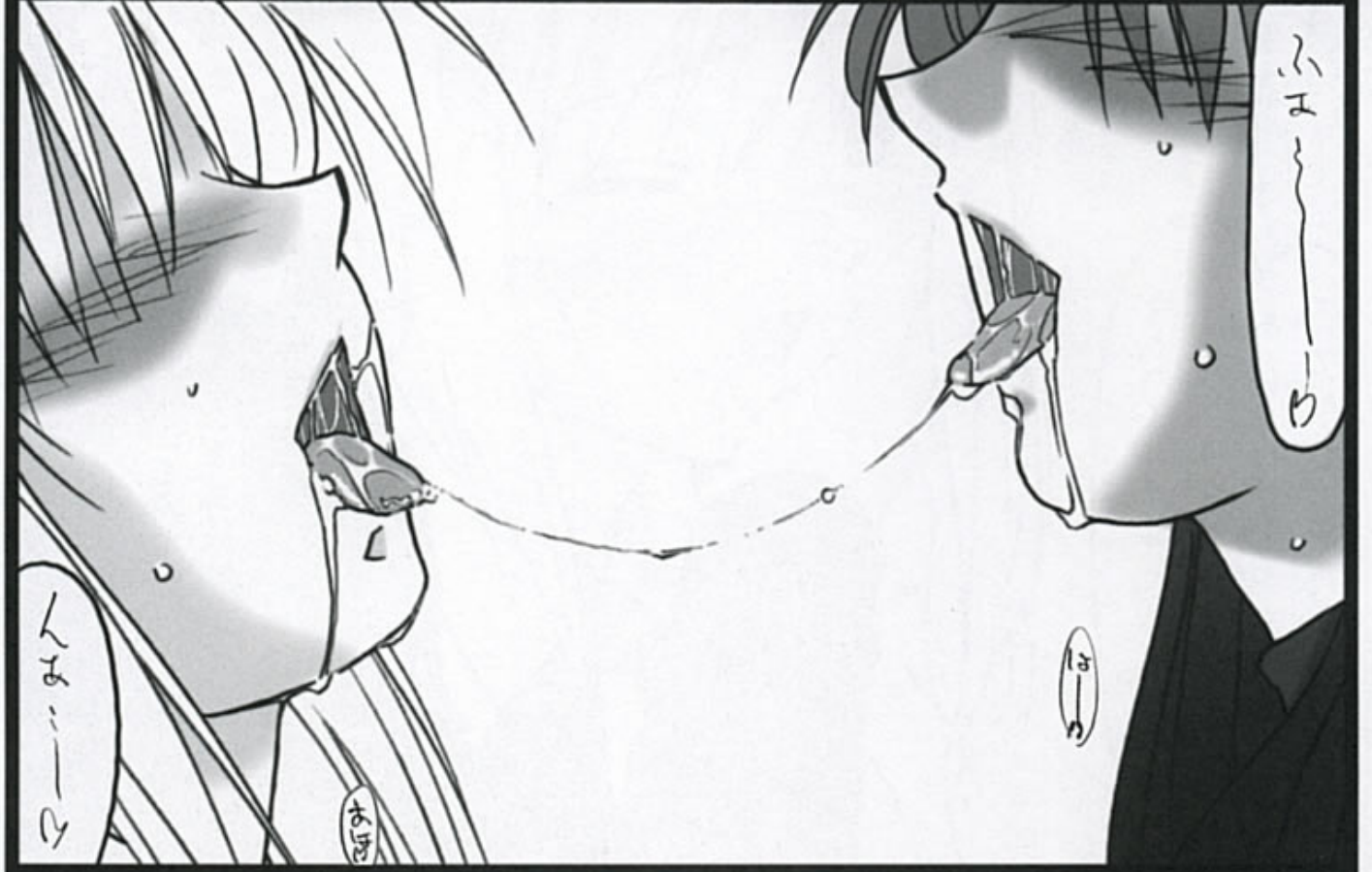


ん...  
あんなに  
泣いてるの  
見たこと  
ない...

や...で、でも  
汗とか...  
あんなに...

汗とかも全部  
おしもくも  
セイレーンのは...

ん...  
あんなに...



ん...  
あんなに...

ん...  
あんなに...



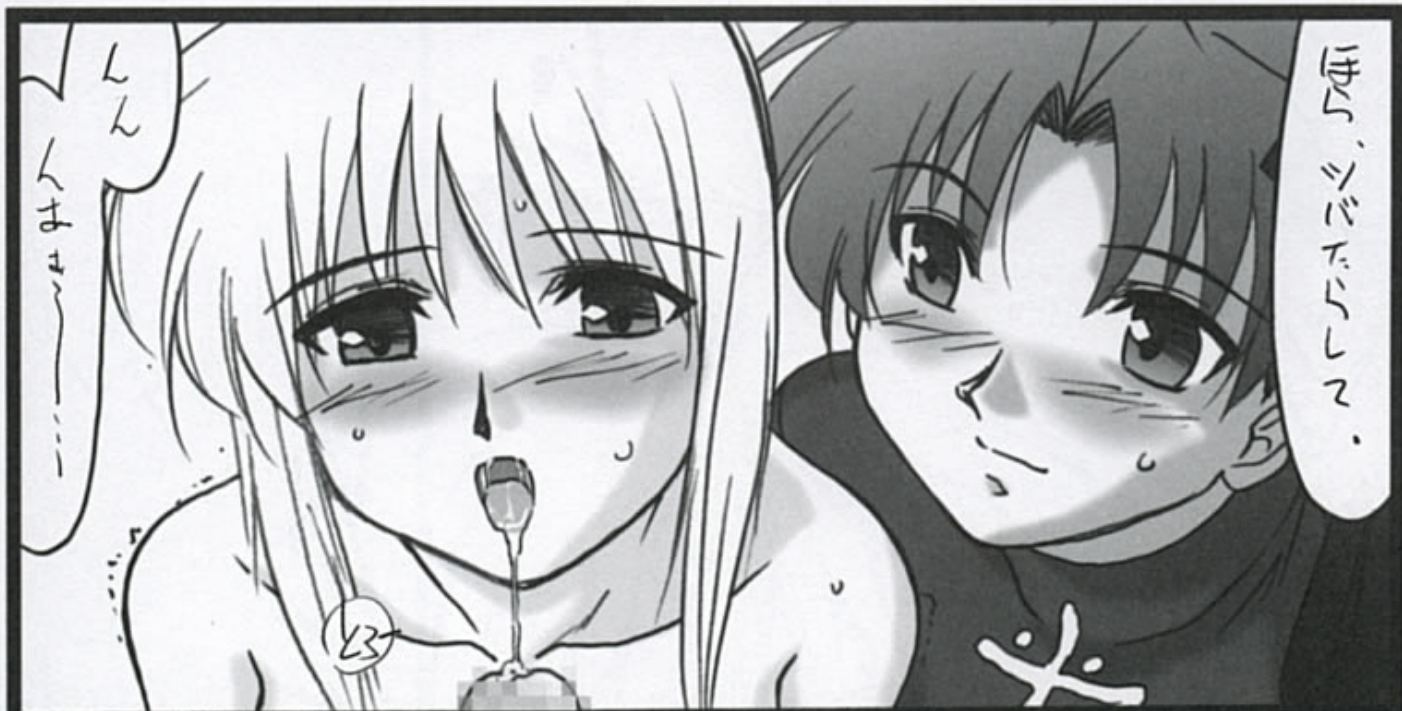












毎度、シブスブして...

しん

.....

②

+



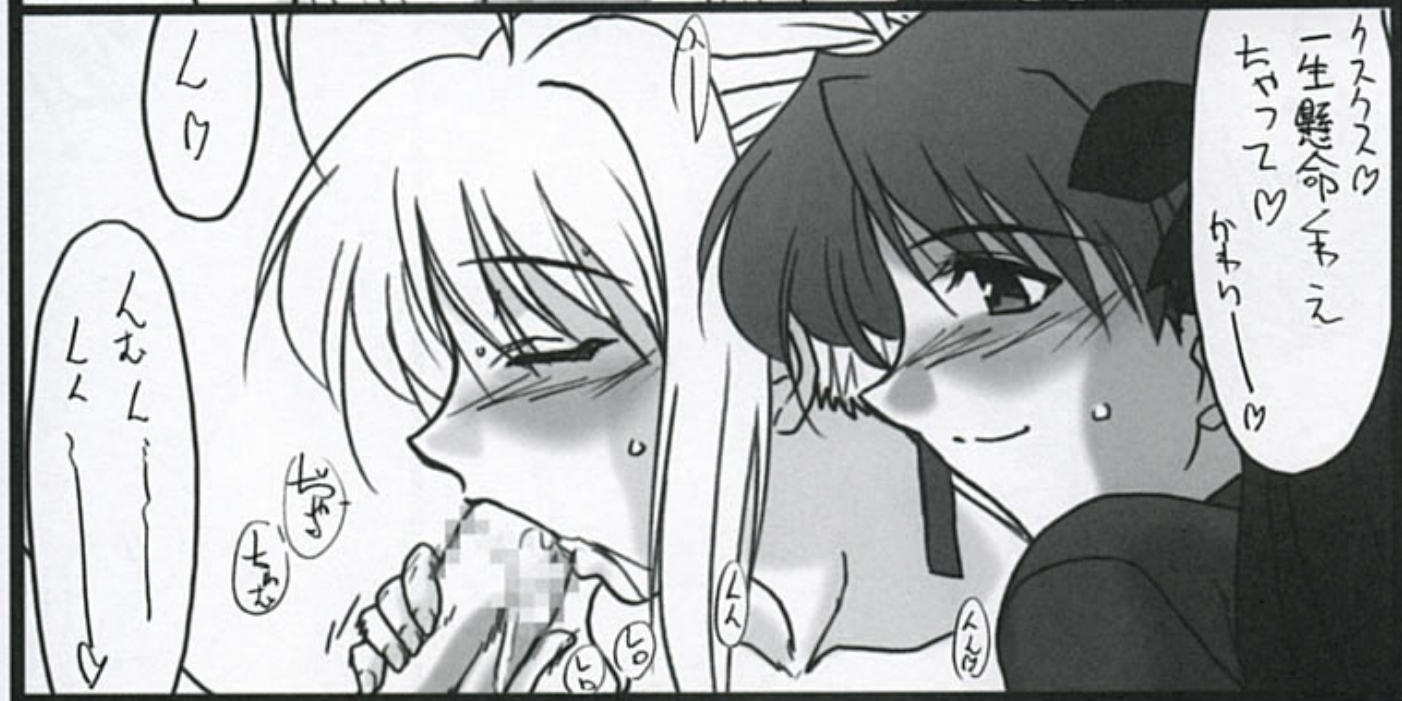
で、士郎はどシブスブなの？  
気持たささくわ...

おあひ...

しん  
あはあ...  
.....

③

④



クスクス♡  
一生懸命もえ  
たっ♡♡♡  
♡——さあ♡

しん

しん  
.....  
.....

⑤

⑥

しん

しん





く...もも...  
射精するぞ!!

ぐわんぐわん

ぐわんぐわん

ぐわんぐわん

ぐわん

ぐわんぐわん

ぐわんぐわん

ぐわん

ぐわん







おえー  
一郎みー



私に挿れ  
してっ、こぼれ  
てー

んー、ワ、どした？  
今日は俺はたまには  
なかつた、エカワ、

ムム...

た、た、...  
サイバーかー

サイバー  
見てたら...



お  
も、う、う、う、う、う、  
横にながー、う、う、う、

お、お、お、お、お、

お、お、お、お、お、  
お、お、お、お、お、







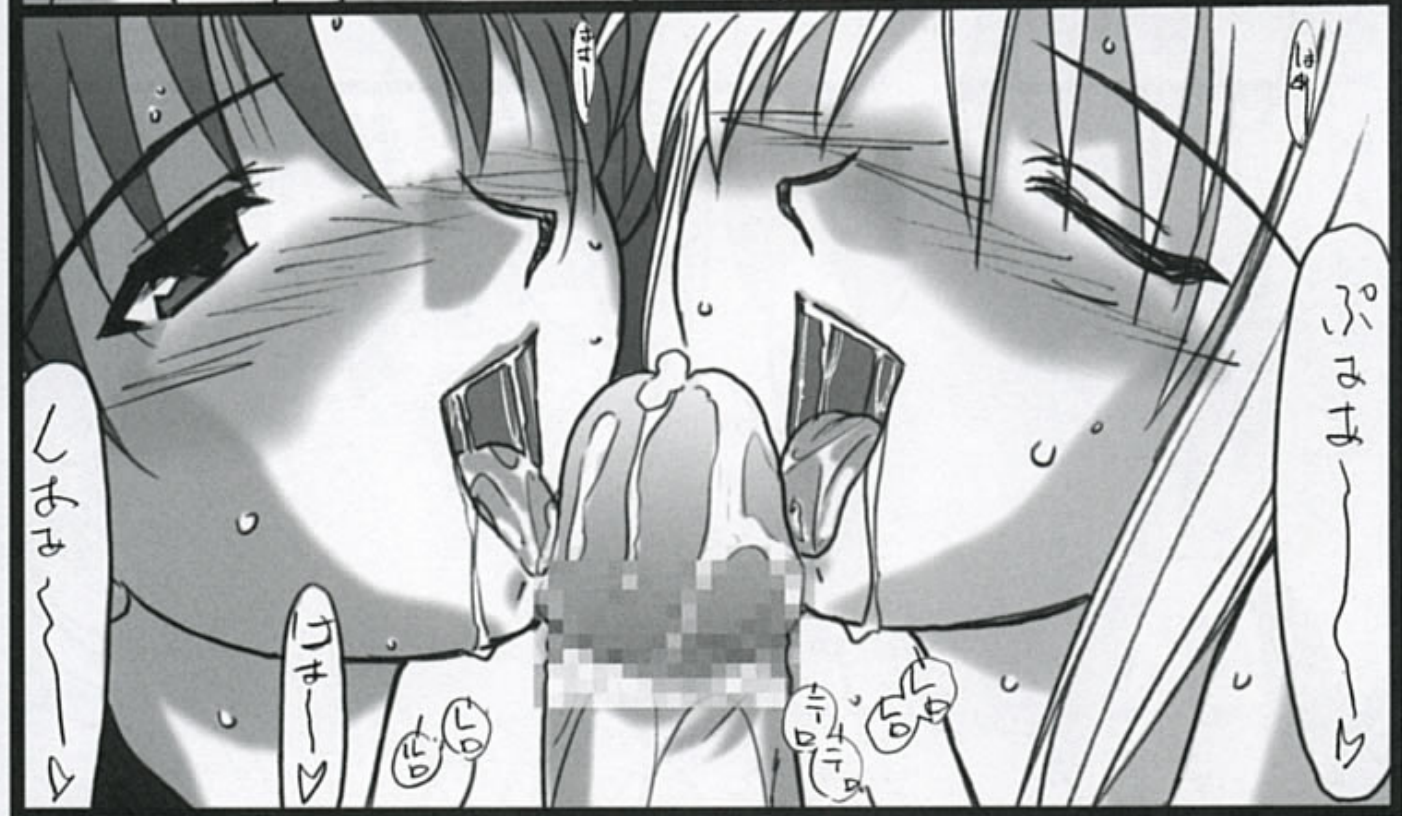






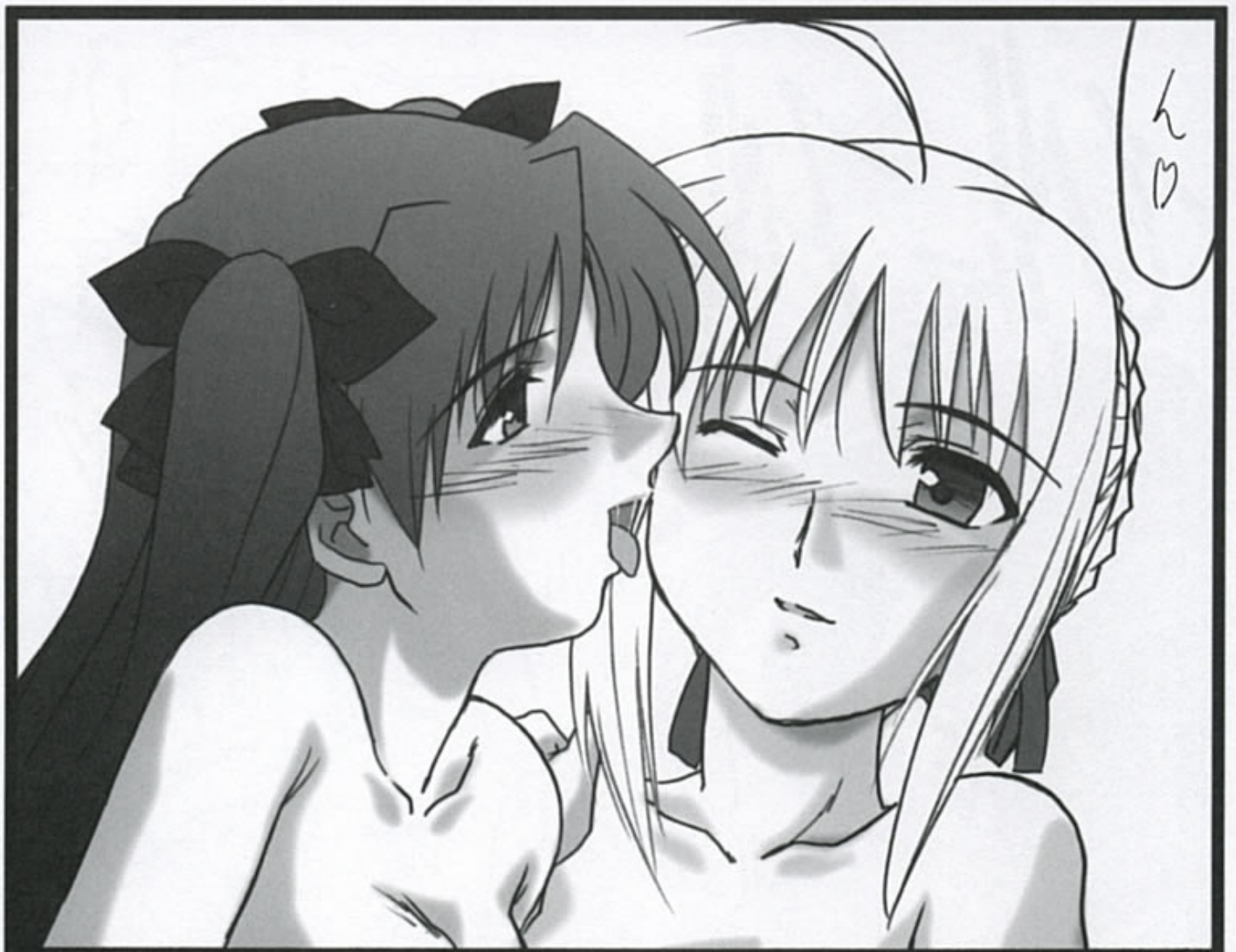
















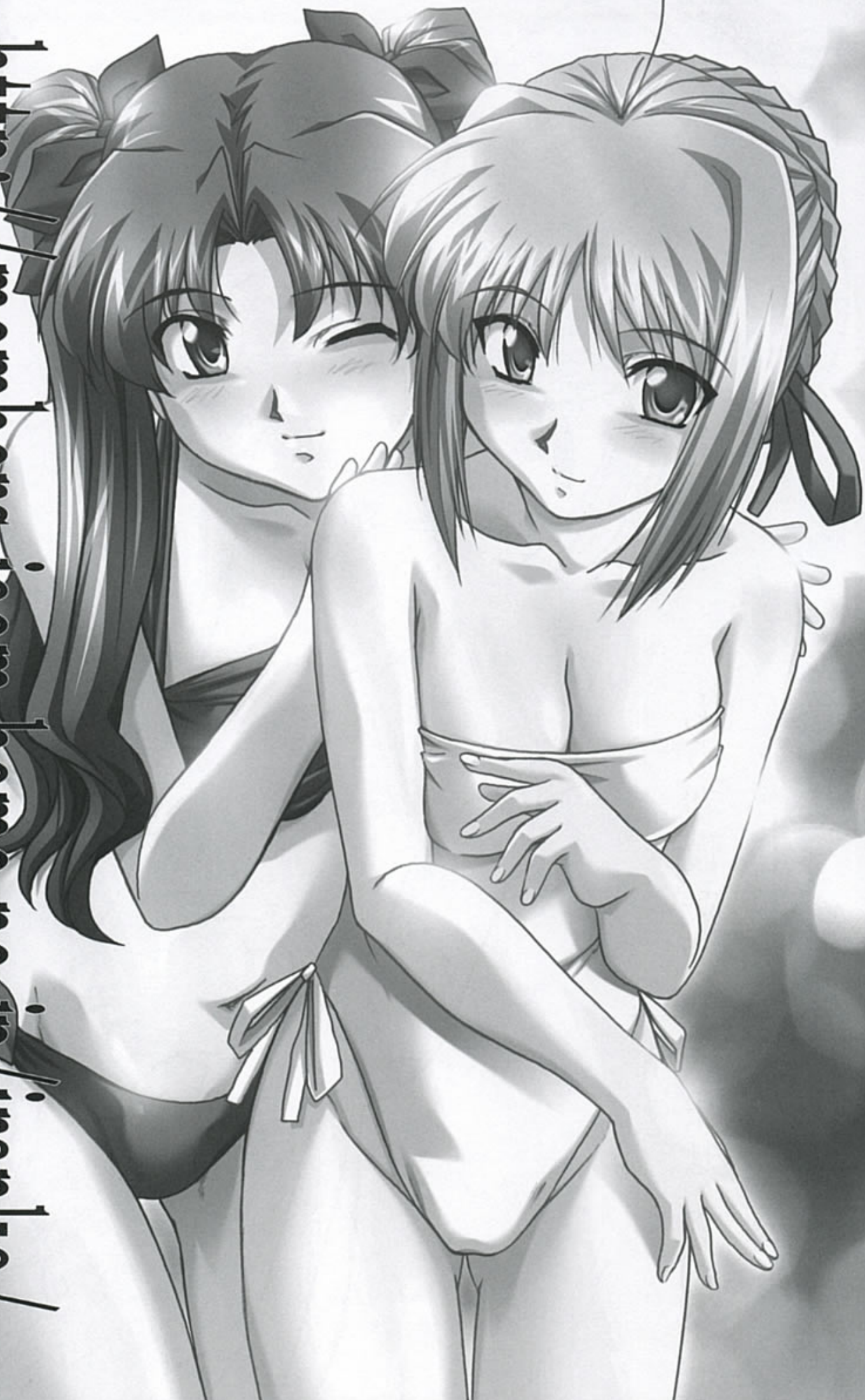
とろろでしりあ、

おなかですきました

あ、またしめ——。

何だよ……。

<http://members.jcom.home.ne.jp/iranko/>



マスター……はやくお願いします……

もう我慢が……できません……



あついの…いっぱい……  
あふれてきちやってる…



■というわけで男性キャラも描いたりして見てます。なんかみなさん色気をまきちらしまくってますよね。18禁だから？いや、それは関係ないか…。




# 陰湿

■言峰神父ですよ。なんかものすごい性格っつーか思考っつーか。いや僕は仏教徒でよかったです…(意味不明)


# 金ぴか

■ギル様ですよ。僕の中でギルガメッシュっていうとオファードしか出てこないんでこのビジュアルはちょっとびびりました。ちなみにオファードは池上遼一先生の素敵漫画です。ギルガメッシュの精子で子供がどうかなかんじの話です。ギルガメッシュのビジュアルは原始人みたいなかんじになってます。それはそれで素敵。





■アーチャーさんはかっこいいですね。ファーストプレイの時に主人公である士郎の思考がかなり受け付けなかったんですけどよ。ほんとにきれいな話のぎるっていうか。そこが話のキモとは気づかずに。やっぱりそうなるってこんなかんじにヒネるんだね(w まあ僕も昔の自分に会ったら改善しておきたいことと改善せるところは一杯ありますけど。



■ランサーっていい人っぽい。なんとなくだけど。でも人殺すことには躊躇もなんもありません。さすがだ。で、ゲイボルクのシーンはアニメでどうやるんだろう？

あれ？俺のユニフォームで見たんだろう…脳内？まあいいや。



こんにちわ！むとうけいじでございます。最初にこの本を手にとってお買い上げいただきましてありがとうございます。最大級の感謝で。自分の希望のままに描いていったらなんか似たようなことばかりやっているという困ったちゃんなことになった上にセイバーとやっていないというありえないオチ！自分でアレー！？とかいう感じになってしまいました。なもんでセイバー描き足りませんよ、もう…。でも僕レズ？というかそういうの描いたの初めてかもしれないです。いや、漫画ですけど。なんか新鮮だった感じでした。さっきも書きましたけどかなり描き足りないんで次も本を作ったときにもう1回行きたいと思っています。見かけましたら手にとって見てくださいます。ちなみに僕は凜のグッドエンドが大変好きです！それだけですけど(w 愛のあるHがアレなんですけど周りからそろそろ陵辱に帰って来いとかそういう非常に心外な事をよく言われます(w 最後になりましたが毎回イラスト描いてくださる西村聡氏とみんなめい氏ありがとうございます。これからもよろしくお願ひします。

むとうけいじ

餓  
弄  
伝

第貳話

シナリオライター Y



## 餓弄伝 エロゲライターへの道

### 第二章 『虚飾の中に破滅と栄光』

#### 一、脱稿

(長い試用期間となった……)

おれは感慨深く呟く。

そう。

そうなのだ。

脱稿なのである。

ふと息をついて振り返る。

それこそが脱稿ということなのである。

今までの短いライター生活でも、厳しいメットという

ものは幾度となく味わってきた。

だが、違う。

違うのだ。

長きに渡る書き物を終えた時の感慨。

それは。

たやすくおれを酩酊させ、子供のように通った道を

省みさせる。

長い道のりであった。

振り返れば、すでに歩み出した位置が見えぬ。

そんな塩梅だ。

まだ駆け出しに過ぎぬ自分が、もうこんなに来たの

かと感じ入った。

(錯覚に過ぎぬ)

襟元をかき合わせる気分で、己が不明を恥じた。

どんな道であろうと、そこに多数の人間が関わって

いる限り、歩みが容易いものであるはずがない。

だが脱稿した。

脱稿したのだ。

一段落がついた。

そう、この日、おれは○○○○○○○○を書き終えた。

専任していたわけではない。

日々を暮らす糧を得るため、働きながらであった。執筆自体は楽だったと言える。

苦勞したのは、資料調査だ。

なにぶん18禁美少女ゲームの脚本などはじめての経験。

次から次へと生まれる疑問に、対処するのは困難を極めた。

インターネット検索などは利用していない。

インターの足で涉猟し、見識を広めねばならなかった。

特に18禁美少女ゲーム——エロゲーの情報となれば、当たる先など限られている。

当時すでに発刊されていた専門誌か、その手のことに詳しい悪友。

いづれかである。

諸般の事情でその手の雑誌を自宅に持ちこめなかったおれは、購入しては悪友の部屋になだれこんでいた。

雑誌は悪友氏のものになった。

なので、文句を言われたことはない。

他人の家でエロゲー雑誌を読み漁り、悪友の助言を仰いだ。

ままならぬ日々。

(だが、それも今日で終わりだ)

終了したデータを会社に送付。

封書で送った。

それがどのような規模であったのか、すでに記録は失われている。

書き終わるのにかかった時間、テキスト量、その他要求された書類の総数。

記憶にさえ掛かってはいない。

セオリーも知らねば、スタイルにも疎い。

駆け出し以前のひよっこだったおれが、当て推量だけで書いた18禁美少女ゲーム一本分のシナリオ。

どう判断されるのか、見当もつかない。

つけようがない。

文章だけなら、すでに何度か見てもらっていた。

企画書ではテキストが読めぬ。

長編小説ではエロゲライターとしてのタッチがわからぬ。

18禁のテキストを一本分書けるかどうか。

実際に書くことで見極めたい。

新進ブランド○○○のディレクター氏は、会社の意向をそうおれに伝えた。

おれは受けた。

そして終えた。

自信はない。

やるだけのことではあったが……自信。

こればかりが、ない。

「ぬう」

唸った。

これでダメなら、他を当たるまで——

すぐにそう思い直した。

おれは明日の食い扶持に困って応募したのではない。

成るために、事をはじめたのではなかったか？

そうだ。

そうだよ。

わかっているじゃないか。

よおっく、わかっている。

だから見てもらう。

見て呉れ。

おれのテキスト力とやらが、○○○にふさわしいかどうか見極めてくれ。

ダメならいい。

やり直すまでだ。

だがうまくすれば……

これで試用期間も終わる。

薄皮のような小仕事ばかりではダメなのだ。

小仕事では、おれはもうたまらぬ。

立ちゆかぬのだ。

だからこそ、呼びかけに応じた。

応募したのではなかったか。  
人は文を解する限り、どこからでも書き始められる  
のだから。

「待つか」  
待つと決めた。

日々の生活の中に、高ぶった自身の精神を横たえた。  
無憂樹の染み入るような香りが、風の中に漂った。  
だが、おれはひとつだけ考え違いをしていたらしい。

試用期間は、まだ始まっていないなかったのだ――

## 二、電撃入社

電話がきた。

「はい、おれですが」

「あ、どうも。〇〇〇の〇〇と申します」

しばらく、その名前を思い出すことができなかった。

「あっ、〇〇〇の……」無沙汰しております」

「はい、お久しぶりです」

〇〇〇〇〇〇を送付した会社の、ディレクター氏  
である。

「連絡が送れまして申し訳ありません」

今でも記憶している。

とうてい忘れられぬであろう。

三月もあと数日で終わり、街には紺色の若者たちが  
溢れようという、そんな時節だった。

「……いえ、そんな」

要求された原稿を送ってから、すでに半年が経過し  
ていた。

てつきり、落ちたものと思っていた。

別の会社に応募を繰り返して、いくつかは面接にまで  
辿り着いた。

中には後に超大手となる〇〇〇〇や、すでに業界を

席卷する勢いのビッグブランド〇〇〇（筆記試験と集  
団面接があつて驚いた）などもあつた。

皆落ちた。

創作でメシを食うことの難しさを改めて知らされる  
思いだった。

当然、就職を決めてなどはいなかった。

日々をしのぐだけの稼ぎを得る日々だ。

そんな矢先の、〇〇〇からの電話。

にわかに湧出してきた混乱と、春の陽気に酔った意  
識を振り払った。

「それで、〇〇〇用件は？」

「ええ……実はですね、以前に書類を送っていただい  
た件なんです」

小石でも投げるかのような口ぶりで、告げた。

「採用となりました」

「は？ 何ですって？」

耳を疑うとはこのことか。

裏返りかける声を抑えることもできぬ。

「ええ、お待たせしてしまつてすみません……採用とい  
うことで……もう他の会社には？」

「いえ、入つてはおりませんが……」

食いつないでいた。

ただ、食いつないでいたのだ。

「4/1に入社式がありますので、参加していただきたい  
んですが」

「なんと……」

目と鼻の先。数日先ではないか。

そんなギリギリに採用が決まるとは、どういうこと  
か？

書類を検分したのはつい最近ではないのか？という  
疑問さえ芽生えた。

「あまりにも、のろい。」

信じられぬのろさである。

（いや、待って待って、おれ。今は夢が大事ぞ）

ただ今やっている深夜の業務、そのスケジュールが

心配になった。

「あの、今やっているバイトの方で車使つてますので、  
その引き継ぎにけっこう時間かかると思うのですが」

「ああ……それは、何とかありませんか？」

「やってみますが……新しい人間を募集して採用する  
まで最低でも二週間は、道順なども教えないといけま  
せん」

「実は上の方の意向で、是非参加してくれ、と」

「……わかりました」

是非参加してほしい入社式は、数日後に行われる。  
半年も前の書類だ。

検討には一月もいるまい。

（まるで、これは）

おれは思った。

（二学期を明日に迎えた、少年のようではないか！）  
「どうですか？」

再度、おれは問われた。

「……わかりました」

おれは場所や時間について確認し、電話を切った。  
そして数日後、おれはまつさらな体でT町の駅に降  
り立った。

今や無職の身である。

しかし、じきに新たななりわいに生きることになる。  
おれは目的地を目指した。

入社式は会社ビルで行うのではなかった。  
近くにあるボーリング場ビルのイベント・フロアを  
借り切つて行う、大がかりなものだった。

会場にはすでに30人ほどの新入社員がいた。  
長テーブルを繋げて列にした空間に、思い思いに座つ  
ていた。

（こんなに……？）

それはおれの知る、ソフトハウスの概念を越えてい  
た。

〇〇〇は確かに赤丸急上昇中のブランド。  
しかし新入社員30人。

これは……ない。  
あるかないかで言えば、先ず、ない。  
ということになるはずである。  
(会場を間違えたか?)  
とも思った。

いや。

間違えてはおらぬ。

間違えてはおらぬはず。

疑問をよそに、入社式がはじまった。

新卒が多いのか、やはりスーツ姿が目立つ。

かくゆうおれも背広着用。

だが、ときおり妙にくたびれた印象の私服姿も見られた。

(いったいこの混沌はなんだ?)

ゲーム開発会社というものの、これがカオスなのさ。

(わからぬ)

まだ、わからぬ。

まずは挨拶と会社説明が行われた。

ここで、驚愕の事実をおれは知る。

「えー、弊社ですが、〇〇グループという会社組織の

集合体です。その中にコンシューマ部門である〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇、18禁美少女ゲーム部門である〇〇〇

や〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

や〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

……

(なん、だと?)

巨大すぎる!

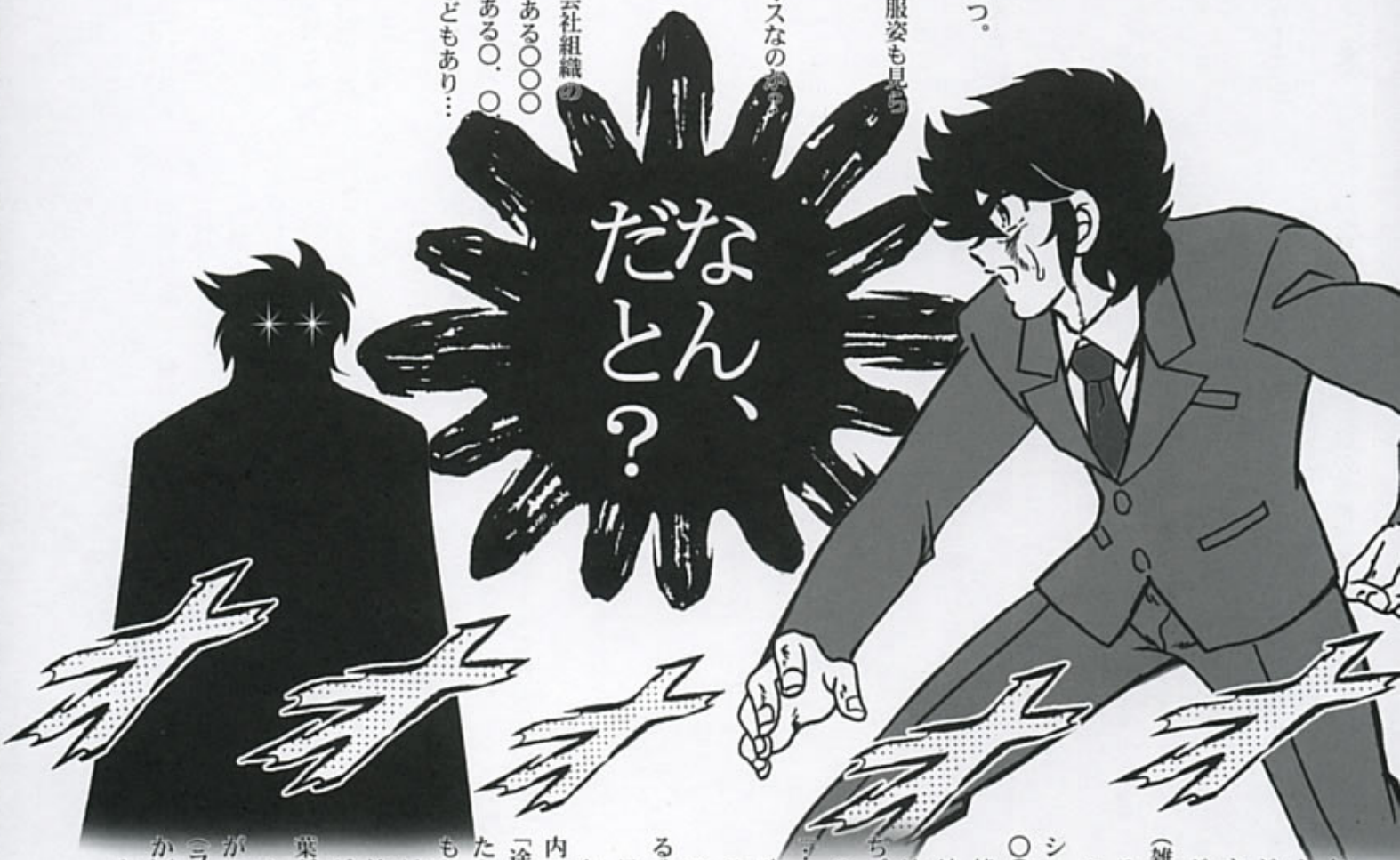
断じて、ソフトハウスの規模ではない。

メーカーではないか。

道理で新入社員が多いはずだ。

ならば、無理な数ではない。

当時は、そう思った。



無理などないと。  
ともかく話は進む。

じきに、ひととおりの連絡は終わった。

すると偉い人が姿を見せ、トークをはじめた。

どこかで見たような記憶がある。

(雑誌で……見たような?)

そうである。

当時、〇〇グループといえば〇〇〇〇や〇〇、コン

シューマーでは初期PS市場で異例の高評価を受けた

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

雑誌等で経営陣の露出があるのは当然である。

続いて、幹部紹介。

波乱のゲーム業界を勝ち残った、一騎当千の強者た

そういう前フリで彼らはフロア前方に立ち並んだ。

確かに長期戦なのだ、と思うばかりだ。

その幹部陣の中に、ディレクター・〇〇氏もいた。

その後、同じビルの洋食店で、ぎこちなく昼食を摂

る我ら30名余。

昼休みには、何人かの人間と談笑した。

気になった私服の男と話してみると、彼はすでに社

内で働いているのだと言う。

「途中入社だったんで、今回の入社式に出席させられ

たんですよ。まあ、区切りというか儀式というか。ええ、

もう一週間ほど泊まり込みですよ。にはは」

はにかみながら男は言った。

泊まり込み。

ゲーム業界なる単語と、常にセットで用いられる言

葉だ。

やはり噂は事実で、追い込みともなれば連日の残業

がこうじて泊まり仕事になってしまいうらしい。

(ライターはどのような局面で追い込まれるのだろうか)

おれは後に、とんでもない形でそれを知ることにな

る。

さて。

食後は解散となり、必要な者は幹部に伴われてそのまま会社に向かった。

おれも当然、晴れて正式な上司となった〇〇氏に同道し、三階フロアに顔を出した。

ボーリング場から仕事場までは、徒歩五分で到着する。

今日からここに通うことになる。

(ここがおれの新天地か)

起案時から通っていたビル。

実は上から下まで〇〇グループが借り上げているものらしい。

部署ごとに階が異なり、四階ならサウンド関係・プログラマー、五階ならグラフィックデザイン……というように分けられているようだ。

三階には例外的に〇〇〇というブランドに丸まる割り当てられている。

といっても、〇〇〇に属する彩色スタッフやらプログラマーやらが全て集められているわけではない。

パーティーションで区切られた経理関係の部署と、〇〇〇が募集しているアニメ(ゲームで用いる)スタッフや原画家だけをひとまとめにしたフロアだった。

簡単に言えば〇〇〇系の絵描き+会計フロアとなる。

ディレクター〇〇氏もここにいます。

経理部門の内情は天井までのパーティーションで閉ざされていてわからない。

が、他〇〇〇スタッフは数名しかいない。使用されていない机や椅子が集められ、片隅に無造作に放逐されている。

閑散とした階だ。

中央に大きなテーブルとソファが鎮座している。会議室がわりに使用されることもあるようだ。

「さて、Yさんの仕事場なんです……」

早速、上司は言った。

「五階のA業企画部に通ってもらいます」

「はい? 〇〇〇ではないのですか?」

「書類上、Yさんは〇〇〇所屬となっていますが……まあそのあたりはあまり気にしないでください」

「は、はあ……」

「企画部は五階にあります。今後は私ではなく、そこで指導を受けてください」

「え? 〇〇さんの下じゃないんですか?」

「はい。先ほどの幹部紹介でも顔は見たとはいいますが、企画部の統括の人が別にいますので」

「……わかりました」

場所も人も関係ない。

おれは五階に向かおうとした。

「あ、ラックはこれを使ってください」

古びたシングル・ラック持参で五階に向かった。

### 三、A業企画部

五階はデザイン課中心のフロアである。

広告関係の彩色をしたり、ドットを打ったり、イラストを描いたり。

そういった直接的な創作が織りなす肅とした緊張が、相応に広いはずの空間を隙間なく埋めていた。

企画部はそのずっと奥。

壁とパーティーションで囲まれた、八畳ほどのスペースだった。

扉までつけられており、完全に別室化している。

その内部に、六つのデスクが無秩序に並んでいた。スタンダードサイズのOAデスクが三つ。

シングルのパソコンラックが三つ。おれのを含めると四つになる。

(OAデスクが大物、ラックは一般社員の席だな)

そう察しをつけた。

「失礼します!」

企画部には数人の社員が、すでに各々の業務に勤んでいた。

ほとんど反応はなかった。

おれが誰か知らなかったのだろう。

再度、挨拶をした。

もつとも入口に近いひとりが、対応してくれた。

新人であることを話し、ラックを置く場所を相談した。

入口のすぐ左側が提示された。

幸い、近くにコンセントもある。

左側がパーティーションと密着してしまい、背中を企画部全体に向けることになる。

しかし新人が入口に近いというのは理に適っていた。

外部への応対も新入りの役目だからだ。

都合七つの座席ができた。

かなり手狭な印象だ。

などと思っていると、さっそく電話が来て、呼び出しを受けた。

マシンを取りに來い、というものだ。

用意されたマシンはNECのキャンピーCb10という旧型の一体型パソコンだ。

誰にも使われていなかったものを回収してきたようだ。

マシンを五階まで運び、ようやく最低限の環境。

(物書きにスペックはいらない)

テキストが書ければ良い。

良いのだ。

企画部員との自己紹介を済ませた。

案の定、企画部といっても一枚岩ではなく、それぞれのブランドに属する企画を集めているようだ。

同業を同じ箇所に集めるのが、ここの社風らしい。

おれの当面の仕事は、会社や業界について学ぶことだった。

今までじっくりと腰を据えてプレイしたことのないエロゲー。

いくつか営業から借り受けた。

それを……プレイ。

プレイ。

プレイ。

プレイ。

イヤホンはない。

ちよつとした羞恥プレイである。

しかし周囲の皆がエロゲーを作っている。

恥にはならぬと、クリックに明け暮れた。

後に、コンシューマー専属スタッフもフロアにはいたことが発覚するが、どうでもよい話だろう。

仕事時間中にゲーム。

優雅に思えるが、集中して何かを読み取ろうとすれば、仕事と大差ない。

当時、今のようなスタイルは確立されていなかった。

かの大作「○○○○」が旋風を巻き起こした。

それを受け、後に自らのブランドをうち立てる新進

気鋭のスタッフたちが負け時と作った「ONE」が、

すでにリリースされていた。

これらは新しい流れだった。

従来の雑然とした世界から、新たなルールが引き出される。

その前兆であるように思えた。

思いはするが、具体的な形を結ばない。

そんな頃合いだったように思う。

もつとも、こうした全体像も当時はネットを活用していなかったため、知る術はなかった。

自分でプレイする他、雑誌、営業サイドの意見、アンケートハガキ等から類推するしかなかった。

件の「TO HEAR」をじっくりプレイしたのもこの時期だ。

会社だけあって雑誌も読み放題だった。

俺はいつそう知識を深めた。

(関係性だな……)

かろうじて掴んだ単語を、口内でもそりと転がす。

これ以前にも、エロゲー自体に触れたことはあった。

例の悪友の自宅でだ。

それは○○○○○○○○4という、大御所メーカー○○

○○からリリースされた美少女SLG。

そして学生時代、○○○○でプレイした、パソコン

業界全体でもビッグメーカーと言える○○○○から発

売された、○○○○○○○○○○という3DRPGである。

前者は片手間でのプレイ。クリアはしていない。

これらのゲームは18禁ゲームと謳いながらも、ゲー

ム性やドラマが主体となっていた。

いわゆる性行為を直接的に描くということが主目的

ではなかった。

それ以前にゲームとして成立する内容だったのだ。

18禁でありながらも、AVなどとは別のアプローチ。

戸惑うとともに、そういうものかと理解に努めた。

なにしろ、おれは○○○○に入社したのだから、当然

その系統を任されるのだと思っていたからだ。

このときは――

ひとまずのリサーチを終えた後、次なる仕事である

○○○○○○○○の手直しに取りかかった。

自発的な作業である。

誰に命じられたものでもない。

この時点で、おれはまったく上からの指示をもらっ

ていなかったのだ。

入社してゆうに一ヶ月は経過していた。

指揮系統に混乱があるのか、あるいは忘れられているのか……。

企画部最奥に位置する、ジャンクフードとパソコン

パーツの包装で覆われた肥沃な土地（上司の席）から

は、何一つお声は掛からない。

おれより一年ほど先に入った先輩が、この人物に「仕

事は上司からもうものじゃないんだよ！」と怒鳴ら

れていた光景をすでに目にしていた。

同じ部署にはいるものの、全員がそれぞれ異なった

仕事に携わっている。

同業の人間を集めている関係上、プロジェクトチー

ム制は不可能だ。

隣の人間が、どのラインに関わっているかさえわか

らない。

それは上司とはいえ同様で、自身の仕事を抱えてい

る。

当然、ディレクターである上司にライターのおれが

指示を仰いでも、意味はなかったろう。

(結構。なら勝手に仕事を見つけて進めるさ)

○○○○○○○○の見直しを進めた。

作業報告は日報に書いて毎日提出する。

これは進捗管理の意味もあるのだそう。

大変に有意義なことだし、おれは日々の進みを細かく記して提出した。

問題がある場合は、別途指示を欲しい……と書き加えて。

ちなみに、この日報の報告面はほとんど読まれることはなかった。

日報がないと万全な出社とは認められない……という

事務的意向のため、ほぼ未チェックで事務員に手渡

されていたからだ。

このことは後に「おまえ今、何やってんだ？」と詰

問された際に明らかになる。

口頭伝達は合理的とは言えないが、時には必要なこ

ともあるのだと知った。

どんな世界でもそう。

効率など関係ない。

「うまくやった者」が勝つ。

それだけだ。

自分もそうだが、他者も皆、不完全であることを前提

に行動しなければならぬ。

上司がゴミの殺倉地帯から身を起こし、髭も剃らず

声もかけずに退出した。午後二時だった。

おれ以外の人間がいれば、一声くらい行き先を告げていくのだが……どうやらいいものと思なされていくようだ。

(いいさ)

おれは膝の上に広げた、エディタのマニュアルに視線を戻す。

いくつか疑問点ができたのでメモをする。

質問くらいは許されるはずだろう。

上司が戻ってきた。

ドトールの紙袋を下げている。

午後二時起き、遅いランチといったところか。

毎日会社に泊まっている。

彼の領土は包装紙類で10センチ高となっているが、

机の下には人間一人が寝ることのできるスペースが確保されている。

(まるで型抜きだな……)

はつきり言って企画部のエリアは汚い。

それは常時、泊まっている人間がいるからだだった。

新人は定時出社が掟。

九時前には掃除とゴミ捨てを行う義務がある。

五階の他の新人とともに、一連の作業を行うのだが

……寝ている人間がいると掃除機は自粛と相成る。

どだい、午後二時に起きる人間が、朝の九時に起き

ていることはない。

そして企画部には、いつも睡眠者がいた。

タイミングを見つけて済ませるしかなかった。

昼食の買い出しも新人の仕事だ。

弁当のメニューを持ち、起床している先輩方に注文

を聞いて回る。

デザイン課は上意下達に慣れていく中で、注文を取る

のもすんなりと終わる。

人数は20人以上いたはずだが、だいたい昼の前後に

フロアにいる者は、7、10名と安定していた。

一方、企画部は相互干渉を極力避ける傾向が強かつ

た。

謎

なので弁当の注文も、滅多に出ることはない。皆、自分で用意してしまうか、寝ているかだ。楽が良い。

だが心のどこかで、体育会系な隣の部署を、羨ましくも思った。

「質問があるんですが、よろしいでしょうか。M I F

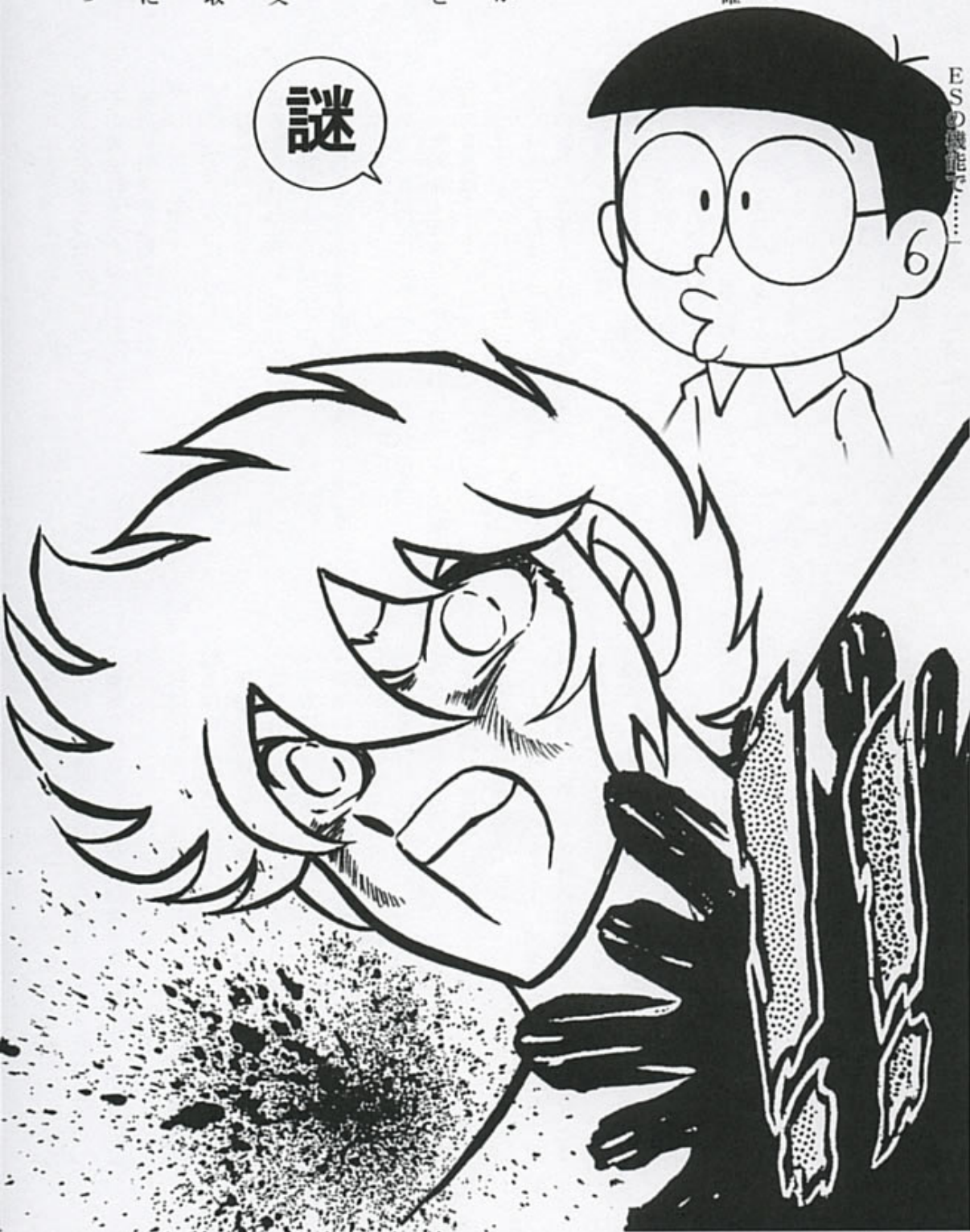
ESの機能……」

メモを片手に、戻ってきたばかりの上司に質問をした。

こういった積み重ねが結束を生むのだ。

上司はアイスコーヒーをすすりながら、ぼんやりとした目をおれに向け、言った。

「謎」



#### 四、企画立案

渋い日々が続く。

リサーチの結果を受けて、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇のいくつかの箇所を手直したあと、おれはさすがに仕事を失ってしまった。

やむなし、と上司にお伺いを立てた。

上司は上司らしく言った。

「謎」

ここに、かつての上司、〇〇氏が来た。三階のあの御仁である。

「うまくやれてる？」

「はい、なんとか……あ」

思い立って、メモを取り出す。

「質問があるんですが、MIFESってわかりますか？」

「ああ、使っているからわかるよ、何？」

4つほどの疑問を解決できた。

このやりとりは、その後も何度か続く。

諸説はあるが、このやりとりが上層部に「今の環境はまずいのかも知れない」と認識させる一助となったのかも知れない。

それに近い話を、ずっと後になって聞かされた。

「ところで仕事がないんですか……」

「あー、そっか……うーん……わかった、誰かになんか回してもらおうようにする」

「特にならぬなら、企画を作るといふのはどうでしょう？」

「ああ、いいと思いますよ」

そういうことになった。

「さて……」

企画立案。

良い思い出はない。

企画とは並々ならぬ苦労をとまなうもの。

企画とはぬきさしならぬもの。

そういうものであった。

（上司の意向……か）

この場合、誰なのだろう？  
知る必要があった。

その機会は意外と早く訪れる。

五階に営業の人間が来たのだ。

「あの、いいですか？」

「あー、何でしょう」

一様に人当たりが良い。

そうでなければ汚い（良い）営業とは言えない。

おれは疑問をぶつけてみた。

「基本的には、トップの人間が見ます」

「やはり……」

どのような会社にも特性というものがある。

様々な零細企業を見てきたおれには、よくよかった。

この会社は——

（ワンマン・カンパニーだ）

俗にワンマンが成立するのは、50人までと言われる。

なのに〇〇グループは、現時点で一〇〇名前後の社員を抱えていた。

指揮系統が鈍化するのも否めない。

「どのような企画が好まれますか？」

「やっぱり、売れ線だね」

「売れ線といつても、最近はいろいろあるみたいですが……何か有用なデータはありますか？」

「うーん、ないねえ……まあ今だったら「〇Heart」とか——」

「ありがとうございまシター！」

人間、いつだってひとりだ。

おれは再びリサーチに取りかかった。

オカルトが好まれないのだけはよくわかっていた。

その意味では「〇Heart」も危険だ。

（あれには〇チがいる）

ロボットだ。

嘘のような話かも知れないが、製品の全体像が見えない書類時には、とんでもない方向からの意見が突き刺さることがある。

たとえば「〇Heart」のようなものを熱望しながらも上がった書類に対し「ロボットなんて非現実的だ」と難癖をつけて没にしようような……そんなことがだ。

目に付いた小数点以下の欠点は、時に全体を突っばねる理由になる。

重箱の隅は、大問題として扱われる。

というタイプの人間は、確かに存在する。

それはボスかも知れない。

あるいは営業の誰かかも知れない。

ついぞ感情を見せたことのない型抜き上司が、怒り狂うかも知れない。

（万全の計算が必要）

考えねばならない。

（まず……魅魅魅魅はナシ）

オカルトやファンタジー、幽霊に魔法といったアブローチは、一括して魅魅魅魅と称され、それ以外と峻別された。

（現実にあるパーツだけで、市場に対しそれなりに訴えかける内容を……構築しなければならぬ）

ハッとした。

（なら、ドラマ作りのメソッドで行けるぜ！）

自分が元はドラマ脚本家を夢見ていたことを思い出す。

（ドラマは紅涙を絞ってナンボ……つまりお涙頂戴ものが受ける）

しかし、すぐに否定の気持ちが生まれる。

（だが……エロゲーユーザーの大半を占める男性に受けるのか？）

おれは知らなかった。

「〇Heart」や「ONE」が、その秘めたる感動によって多くのユーザーの支持を受けていた……その大きな流れを。

おれは流れの最中に偶然飛び込み、

（お涙頂戴。ドラマの基本だ。いいぞ！ 次は……モ





司が介入してきて仲裁したりといった光景が、ここそ  
こで見られるようになっていた。

まだシナリオも素材も完成してはいなかった。  
フラグ管理は絶望的な状況。

プログラムの問題。  
スクリプトの問題。

開発中のスクリプト仕様変更による問題。  
人間関係の問題。

指定の誤り。  
指示の誤り。

ダミーデータの偏在と、本データの不明。  
そういったものが何を引き起こすか？

想像することは容易だが、現実には常にその上を行く。  
バスのアルゴリズム(?)がおかしな挙動を示す。

ヒロインが突然主人公を嫌う。  
同じイベントが日に二度起こる。

必要なイベントが発生しない。  
と思ったら実装されていなかった。

実装したとスタッフは言う。  
調べると誤ってバージョンを古いものの上書きして  
しまっていた。

誰のせいだ。  
責任のなすりつけあい。

ケンカ。  
みんなに悪いということ

で落ち着く事なかれ主義。  
とりあえずケンカして二人の座席を離すことが決  
定された。

その傍らで、バスのアルゴリズム(?)はおかしな  
挙動を示し、ヒロインは突然主人公を嫌い、同じイベ  
ントは日に二度起こり続けた。

マスターアップ二週間前だった。  
出る出ると噂されていた同級〇3のリリースが掻き  
消えようとしていた頃。

我らは獅子身中の虫との死闘に明け暮れていたの  
で。

ある。

虚構内の安定を破壊し、超現実主義的な何かへと置  
換する、悪魔のコードが織り交ぜられたような。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇とは、そんな呪いに見舞われた  
タイトルだったのだ。

さて。  
スタンドアローンで日々を過ごしていたおれは、あ  
る日突然、旧上司〇〇氏から通達を受ける。

「今日から泊まっていつて欲しいんだけど」  
「急ぎの仕事ですか？」

旧上司はおれを三階に呼び寄せる。  
まだそこは静けさを保っていた。

「それとも、出した書類に問題でもありましたか？」  
「そうじゃないんだけど……その、みんな泊まってる  
のね」

「はい、みんな泊まってますね」  
「で、マスターアップ前なのね？」

「はい、マスターアップ前です」  
「……つまり、その……」

おれは察した。

「はあ。皆の手前、毎日帰る者がいるとマズイと」  
「はい、そうです」

「……相変わらず、急です」  
「ごめんなさい」

「明日から構いませんか？」  
「今日から……是非」

「……相変わらず、ですね」  
「ごめんなさい」

物腰の低さに勝てない。

「……着替えを取りに行くくらいはいいでしょう。今  
日中に戻りますよ」

「はい、すいません……外出許可を出しますので、よ  
ろしくです」

頭を下げられても困る。

帰路、いろいろと考えた。  
「……忙しくて泊まるのは覚悟していたが……まさか

政治的な理由で宿泊することになるとはな  
まったく世の中は、面白い。

おれは自宅で一週間分の衣類を用意し、カバンに詰  
めた。

実家に電話し、しばらく繋がらないことを告げた。  
細々とした用事を済ませ、家を出た。

おれはまたあやまちを犯していた。  
一週間分の着替えしか用意しなかったことだ。

\*\*\*

初日は、自分の仕事を延々と続けるばかりだった。  
その間、誰からも声をかけられることはなく、話し  
かけても無視されるか追い払われるか。

どちらかだった。  
とある人間に弁当の注文を聞きに行った際、慌てて  
周囲から止められたこともある。

要するにそれは「爆弾に触れるな」という意味の周  
章に違いない。

時間の経過とともに、崖っぷちに追いつめられた人  
間が散見されるようになっていた。

誰もが苛立っていた。  
誰もが怒っていた。

遅々として進まぬ開発とは、こういうものかと。  
エロゲーとは、こうなるものかと。

これは——  
きつい。

じわじわとした圧力に、長時間晒される厳しさと似  
ていた。

一瞬だけの苦境ではない。  
ロングスパンの苦しみ。

それが開発だ。  
できるのか？

本当にマスターアップするのか？  
しなければならぬ。

誰かが告げた。

天使の告死のような厳肅さで。

宗教洗脳に近い深度で、我々を駆り立てる。

しなければならぬ。

マスターアップしなければならぬ。

企画部の座席には、いよいよ空席が目立つようになつていた。

殉職したわけでも逃亡したわけでもない。

移動である。

たとえばスクリプトとプログラムのかねあい。

いちいち階を跨いで打ち合わせをする。

相手のフロアに乗り込んで細かく話し合う。

そういったロスが問題視されはじめていた。

実際、やってきた質問者が、当事者がいないためフロアで足止めを食らう、という現象がよく見られた。

それを偉い人が見て、問題視した。

鶴の一声。

当人同士を隣同士で座らせれば良い——

そういうことになった。

企画部員の移動が起こりはじめていた。

やがて労力が足りなくなつてくると、おれも三階に臨時移動となった。

三階には大きな会議用テーブルがある。

ここでは常に重要な話し合いが行われていた。

書記や雑務を行う人間が必要とされた。

おれは討議内容を筆記し、口頭で告げられる演出指示を打ち出したシナリオに書き込んだ。

書き込んで、書き込んで、書き込んだ。

その手の作業は、一度開始されるとシナリオが終わるまで続く。

二日、三日とぶつ続けて行われた。

これをまた誰かが見て、実際にスクリプトに演出を組み込んでいくのである。

当時は、演出者がある場で書き込みながら読み進むよりも、効率が良いとされていた。

シナリオを音読しながら演出指定を告げる。

これは。

非常に時間のかかる作業だった。

M A P 移動型のシステムである。

そのイベントがどの時間帯に発生するのか、わからないというものもあった。

それを誰が決めるのか、誰が担当してるのかさえわからない。

保留とされる。

いつか、誰かが演出をするのだ。

日に日に、おれは不安になつていった。

しかし心のどこかでは、誰かがこれら全ての問題を解決するのだろうと、信じていた。

そうでなければとも完成するとは思えなかった。

全権が与えていたわけではないそうだが、ディレクターは〇〇氏だそうだ。

有能な人間である。

それはわかる。

だが社内全体を見渡せば、濃くなった疲労の色は軽視できないレベルに達していた。

おれはひとり、煽っていた。

誰もが神経をすり減らす合宿の中、ひとりだけ何も携わらせてもらえていない気がした。

実際、おれのしている仕事は誰にでもできるものではない。いらぬ努力……いらん子なのだ。

現場でまったく必要とされない人間。

プロとして、これほど恥ずかしいことは他にない。

たまに外に出た。

空を見上げて強い陽光に目を細めた。

一本のゲームも出していない。

だから。

実績がない。

だから。

信頼されない。

今の泊まりだって、切迫してのものではない。

政治的配慮。

タミー。

体裁を繕うための泊まり。

誰も見ていない場所で、ひとり、唇を噛んだ。

\*\*\*

\*\*\*

部屋の片隅に乱雑に重ねられた、デスクと椅子の山。

その脚の隙間を、奥を目指して進んでいた。

匆匆前進であった。

這っていた。

そこは三階のデッドスポットだ。

網目のような道を抜けた先に、人ひとりが眠れる程度のスペースがある。

人目につかない、安全な場所だ。

そこを目指す。

一〇〇人近い人間が泊まっている。

寝場所の取り合いは、いつも発生していた。

自分のラックの下はダメなのか。

ダメなのだ。

周囲が殺伐としている時、眠ることは許されない空気が流れていた。

五階の企画部エリアは、今や魔窟のような土地に変わっていた。

寝ていけば、蹴りが飛んでくる。

踵が、

砕くのだ。

眠れぬ者たちは、周囲の人間に対しても不眠を強いるものだ。

60%だった。

そのエリアに属する人間のうち、すでに60%が寝ていけば横たわっても構わなかった。

今度は逆に、作業者が静かにする番となる。

苦勞している者に対する配慮。

そのひとつが、眠る姿を見せないことであった。

一般論ではない。  
一般的にどうか？ということではない。

社内という閉鎖空間におけるルール。

一〇〇人という人数が紡ぎだす、暗黙の掟。

流れに逆らえば、多数の憎悪を浴びる。

誰が悪いのでもない。

批判しようというのでもない。

ただ人間とは、そうしたものだ。

自分が忙しい時に、隣で寝ていたら、

こんなくしょう——

そう思ってしまう。

ということ、言いたい。

だから誰もが、自分だけの秘められた睡眠スポット

を求めていた。

おれが今這い進むOA用品の墓場も、そのひとつである。

「……ぬう」

しかし、空間に抜けたとき、おれはもう進むことができなくなった。

すでに睡眠している者がいたからだ。

まるで、サイバイマンに殺され死亡したヤムチャの

ような寝姿だった。

半死半生、土気色の顔色。

「ううううう……」と決して途切れない低い呻き声。

危険な徴候と思えた。

だが。

できることはない。

たとえ大病を患っても、現場を退くことは許されな

い。

マスターアップなのだ。

おれにできることはなかった。

ただ場所を譲り、引き下がるだけである。

来た道をゆっくり戻り始める。

すでに、三週間が過ぎていた。

社内には獣の臭いが立ちこめている。

人臭はカーベットに染みる。  
誰もが裸足で社内を歩くためだ。

そのため空気の入換えなど、いくらしても無駄な

のだ。

人臭……いや獣臭といつて良い。

獣臭で吐く者がいる。

それでもなお、仕事は終わらぬ。

精密さが求められる作業を、薄暗いフロアで、澀ん

だ空気を吸いながら……行う。

劣悪な環境の中で、ときにモニター酔いをするこ

もある。

30時間を過ぎると頭痛がはじまり、40時間に近づくと嘔吐をこらえねばならない。

50時間に達するともう、いつ鼻血が出てもおかしく

ない。

不眠の出血には、死の味が混じるのだそうだ。

吐くという行為。

そこはまだ。



安全地帯。

まだまだ戦える、限度線の手前。

だから吐く者は、じきに慣れた。

吐いて、吐いて……そして慣れた。

感じなくなるのだ。

なんとも感じなくなる。

自分がおかしくなったことにさえ、気付かぬ。

二週間に及ぶ不眠生活とは、そういうものだ。

アップ一週間前。

とうとうデバッグ作業にまで、工程は辿り着いた。

一般社員の多くが、実作業から解放されていた。

だからデバッグ作業のヘルプに回る。

おれも三階の雑務から解放され、五階の自席に戻り、

デバッグに入った。

もちろん一部開発は続行中である。

デバッグの途中で、新たなバージョンが回ってくる。

一日に二度、回ってくる。

無数に生み出されるバグ報告は、数バージョンをまたいで残り続ける。

報告から反映まで、だいたい1バージョンを間に挟む。

少しでも報告の甘いバグは「再確認」の赤字とともに戻ってきた。

時折、血相を変えたプログラマがバグ報告者に質問に来る光景を見た。

冗談じゃないぞ。

そんな顔をして詰め寄られると、何も言えなくなる。

問題が重用視されると、幹部数人とともに担当者がやってきた。

その光景は、不審尋問に近い。

重大なバグが起こった条件を、問いつめられた。

バージョンが変わると、セーブデータは使えない。

M A P 移動型の恋愛 A V G である。

1 ルートクリアするまで、20時間はかかる。

19時間目に発生したバグの「再確認」。

それは。

地獄である。

そもそも、半日単位で新バージョンが来る。

後半の展開は、ほとんど見ることができないのが現状であった。

専任のデバッグチームがいる。

本命はそちらだ。

おれたちは、網の目を逃れたような、小魚を狙う。

デバッグノートにバグ内容と発生条件を書き込む。

コメントつきで戻ってきたノートをコピーし、バグ報告者の元に戻す。

「再確認」「修正済」「保留」……そうしたコメント

に対して、確認をしていく。

「修正確認！ 終わった！」

「これ、次のノート分」

どさりと鳴った。

束である。

ノートコピーを各デバッガーに振り分けるためカットしたもの、短冊と呼んだ。

少しでも気を緩めると、短冊は束になって積まれるのである。

日本中の七夕でさえ、これだけの短冊をこしらえた

かどうか。

ああ。

イヤだ。

もういやだ。

もう再確認はいやだ。

再確認。

それは。

本当にこのバグは出るのか？

ちよつと確認してみ？

である。

なんという。

なんという。

なんとという。

たぐさんだ。

勘弁してくれ。

怨嗟の音が、ふつふつと下腹に沸いてくる。

叫びだしたい。

眠りたい。

もうバグなど報告したくはない。

報告したバグには確認義務が発生する。

自分が書き記したものは、いずれ自分でチェックしなければならぬ。

報告をしたくない。

おお。

おお、バグよ。

見つからないでおくれ。

どうかおれの目を逃れて欲しいのだ。

なあ、バグよ。

バグよう。

頼むよ。

頼むよオイ。

だがバグは続々と発見され続けた。

これを。

これを修羅と呼ぼず、何とするのか。

夜中の三時までは寝てはならない。

朝の九時には起きねばならない。

ラスト三日ともなると、寝ている者はいなくなった。

頻繁に、最高級焼肉弁当が振る舞われた。

希望する全社員にである。

知っている者も多いだらう。

叙々苑の名を。

高いなどという、可愛らしい店ではない。

高いのではない。

狂っている。

どうかしている。

そんな焼肉屋である。

いや、もはや屋などと呼ぶのものはばかられる。

焼肉ブローカー。

これである。

かの叙々苑には、弁当メニューがある。知っている者は少ないはずだ。

出前はしない。

注文し、客が取りに行く。

ずつしりと重い、重箱を模したような弁当箱が、夜ごとに運ばれてくる。

メニューを手に注文を取りに来た営業の若者は言った。

「値段は見ないでいいですから」

だが見てしまう。

ひとつが1800円以上する。

上カルビ弁当など2400円もする。

2400円。

ただならぬ金額である。

カローリメイト12食分。

ちくわならざつと35食分である。

これを複数注文することも可能だった。

キムチをつけても許された。

おそらく経営陣のポケットマネーから出ていたのだろう。

睡眠のかわりに肉。

眠るなよ。

食えよと。

だから食えよと。

眠らせてやれねえからよ。

俺（おい）らはよ、ゲーム屋だぜ。

眠らせてやんねえからよ、だから。

食え。

好きに食え。

代償とはならぬはずの取引が、会社組織という閉鎖

された異世界では、成立した。

記憶はほとんどない。

焼肉。

デバッグ。

短冊。

短冊。

焼肉。

短冊。

断片的なメモリーしかない。

気が付くと、落ちていた。

眠くなったから、落ちたのではない。

断じてない。

気付かぬままに、意識が断絶した。

気絶とも違う。

まさに、落ちるといふ言葉がふさわしい。

目覚めもまた、不可解な時間感覚の喪失をもたらした。

幽鬼の足取りで、三階に向かう。

妙にフロアがガランとしていた。

おれはキャンピーの火を、実に二週間ぶりに落とした。

このマシンはスペック不足で、MAPを歩く主人公

のドットキャラは、通常の30%ほどの速度しか出して

はくれなかった。

会話シーンなどは問題なかったが、ゲーム部分の進

行がスローモーション化した。

余裕があれば、もっと適したマシンを回してもらえ

たのかも知れないが……

このデバッグ環境を見たひとりが、

「おまえいてもいなくても一緒だな」

と言った。

おれはそいつの後頭部に、殺意の波動を注ぎ込んだ。

三階に行くと、旧上司の〇〇氏が変わらぬ風体で作

業を続けていた。

ここも人は少ない。

寝ている者が散見されたが、分母が著しく減少して

いる。

皆どうしたのか。

ドナドナされてしまったのか。

まさか。

まさか——

「終わり、ですかい？」

「いかにもさようさ」

こちらを見もせず、言った。

「一部スタッフでもう一巡デバッグをかけるが……緊

急動員組の人たちはいったんアップということ……

帰って構わない」

このとき、おれは電撃に見舞われた。

何か、言い出しそうになった。

気が緩んだせいか。

秘められていたものが、弾けかけたのか。

「ああ……あの」

告げそうになった。

何を告げようとしたのか。

わからない。

今もって、わからない。

時折、人間にはこうしたわからない瞬間が訪れるの

だ。

それはときに人生を大きく揺るがし、別の道を開か

せたり、閉ざしたりするのだ。

「……………」

ただ、集中する〇〇氏には届かなかったようだ。

すると、おれの気も済んだ。

削ぎ落としたように、過去のことを忘却できた。

「……お先に失礼します」

「一週間休んでください」

一礼し、会社を出た。

二週間が過ぎていた。

## 六、社畜

体を休め、再び戦場に戻ってきたおれを、出迎えた者はいなかった。

社内は素漠として、かの狂乱をさえ夢幻の如く思わせた。

(人が、おらぬ)

そう。

少ない。

人が少ないのだ。

(マスターアップ休暇か。そうか)

納得した。

皆、この際に取り除かれるだけの休みを取っているのだ。

最後に一巡をかけると言っていた中核スタッフも、

すでに仕事を終えているようだ。

誰の姿も見えない。

(たまにはこういう静けさも悪くはない)

数えるほどしか人のいないフロアに、日頃の緊張感

はない。

(さて……どうしたものか)

直属の上司なるものがないおれは、命令されない

限り、仕事はない。

よって自分で作業を見つけていかねばならない。

おれが入社した時点で、先輩ライターは一人しかい

なかった。

社員数一〇〇人を抱えるメーカーに、ライターが二

人。

瞬間的には一人だった時期もあるだろう。

(この状況下で、どう動くべきか)

おれは漫然と企画書を作りながら考えた。

キーボードを刻む物音が、無人に近いフロアに響く。

何人ものライターが辞めていったらしい。

(なぜ?)

かつて〇〇氏も、ライターというものには慎重にな

らざるを得ない、と言っていた。

だろう。

そして感受性が豊かであればあるほど、打たれ弱く

なりがちだ。

シナリオにこだわろうと我を張れば、社内の評価は

下がる。

無法者となることもある。

だが、それでも、作家性は求められるのだ。

ライターとして社内で評価を得る方法はひとつだ。

可能な限りの短期間で、上の指示と判断を最優先に

しつつ、作家性溢れる傑作を書き上げることである。

できるのか?

そのようなことができるのかと、誰もが思う。

するのがプロである。

なるほど。

なるほど、なるほど。

理屈はわかる。

確かに月産ベースで、上が満足するモチーフだけを

選択しつつ、世紀の傑作を脱稿できれば……それは素

晴らしい。

できてこそそのプロであると言われる。

だが月産ベースで上が嫌がることを一切せず正規の

傑作を脱稿することは、まず不可能だ。

不可能を闇雲に目指すことはプロとは思えない。

手持ちの武器でやりくりするしかないのだ。

不可能であるから、素質がないからこそ、工夫が必

要になる。

中途入社である。

新卒ではない。

スキルはある程度固まってるしまっている。

建前として会社は「これからの成長に期待している」

とは言うだろう。

しかし上に人を立て、逐一指導するということはな

い。

おれは自分で考えていかねばならない。

その比率は、新卒よりもずっと多いはずだ。

(中途採用でありながら、まだ何の役にも立っていない)

黙ってモニターの前に座っていれば、一日怠惰に過

ごすこともできた。

注目度が低いのだ。

光らねばならない。

かのサイレントナイト翔のように。

自分で光らねばならない。

(おれは……社畜にならねばならないのか)

管理の甘い環境で、半端物扱いされるのは耐え難い

苦痛だ。

より取り立てられるためには、どうするか。

社畜。

会社の狗である。

(なるのかよ、おれが)

そうか。

いいぜ。

なってる。

(おれは社畜になる)

自分の中で、今まで貫いてきた何かが折れた音がし

た。

屈服の音ではなかった。

弱まった音ではないのだ、これが。

不思議なことに。

矜持を捨てることで、おれは何倍も強くなった気が

したのだ。

錯覚、であろうか。

どうであろうか。

(わからぬ)

おれはこの時、変質したのかどうか。

いまだに、結論が出ないことなのだ。

アップ前に構想したものを書類化することにした。

例の妹もの企画だ。

基本的なあらすじと登場人物を決め、書類化した。

驚くほどすんなりとまとまった。

さつそくその書類を型抜き上司に提出せんとする。  
「……俺、君のことよくわかんないから、〇〇君に出  
してくれろ？」

「ご指導ありがとうございます、シタッ！」

そして上司は身を起こすと、行く先も告げず髭も剃  
らずに出て行った。午後二時だった。

\*\*\*

しばらく経ったある日。

五階の一角にある、我が企画部に、内線電話がかかっ  
てきた。

おれしかない。

取ってみれば、これが偉い人からである。

以前に出した、病弱な義理の妹企画が採用された、  
というものだった。

偉い人の一存らしいのだ。

(なるほど、これか)

確かに〇〇氏の権限だけでは、おれの企画をどうに  
もできないことがわかる。

良くも悪くもワンマン会社ということだろう。

経営も開発も、となれば、採否に時間がかかったの  
もうなすける。

電話を切る。

狙った通りに書類を作り、狙った場所に当たる。

それだけのことに、妙に達成感があった。

個人的には、闘病ものを好むというわけではない。

思い入れのないものに挑むことになる。

おれは、抵抗なく「クリエイティブ」という単語を  
口にすることができた人間だった。

自身の厳しさを誇るためだけに4以降のFFを非難  
し、通ぶったつもりでいる人間だった。

これからは、そんなおれとおさらばしなければな  
らない。

もし。



# 社畜

このプライドに負け、自身の作家性ばかりを押し立  
てていくなら。

おれはいつか物書きとして破滅してしまうのではな  
いか。

いや、きっとそうなる。

確信である。

自らを塗り立てねばならない。

社畜に。

実力では信頼は得られまい。

なぜなら作家の実力とは、好きな方面を力の限りに  
描くことで、はじめて成立するのだから。

そもそも魑魅魍魎が封じられたなら、おれは新たな  
自分を構築する他ない。

興味がなかるうとも、書く。

最速は無理としても、ある程度の速度で書く。

まとわるような詩美を魂に乗せて込めることは難し

かるうが、水準以上の質ならば、技術次第でどうにか  
なる。

おれは作家ではない。

おれは売文屋だ。

恥知らずになる。

おれの破廉恥さに、誰もが唾棄する。

そうしている限り――

書ける。

(これだな)

言われるままに書く。

望むままに書く。

第一歩が、これである。

難しい。

自分を制御することは難しい。

簡単なことではないだろう。

だが。

書くべし。  
書くべし。

信じた。

ただ書き続けることに、最大の意味……栄光があるのだと。

物書きの誇りと、社畜と。

天秤にかけて、書ける方を選んだだけのこと。

書きたかったのだ。

ただ、書きたかった。

譲るくらいなら断筆も辞さぬと。

そういうことは、おれにはできそうにないと知った。

知った途端、指先が燃えた。

商売道具である。

失って、また生えてくるようなものではない。

しかしおれは、焦らない。

炎に包まれ、焼けただれた十指を鍵盤（キーボード）に置く。

指の腹をずしりと置く。

爪まで噛ませる。

ゆつくりと、そう、ひどくゆつくりと。

指が鍵盤を押し始める。

踏みしめるように押し込む。

両肩を前に押しだし、体重をかける。

エディタの青い画面に、表示される文字数が増えていく。

次第に。

速度が上がるのである。

これが自分では気付かない。

知らぬうちに、極まったいく。

おれは鍵盤と一体になる。

企画書を一度分割し、肉付けをしていく。

丹念に丹念に、ディテールを重ねていく。

すると。

良いものができる。

昼飯も食わずに打ち続ける。

自分以外は誰もいない企画部で。  
一心不乱になって燃え続ける。

「くく……」

笑みがこぼれた。

この上なく愉快だった。

社畜とは、意外に愉快なものなのかも知れぬ。

はじめて書くものが、自分の天職であるかのように

感じられる。

（おれは何でも書けるのではないか？）

心地よい慢心が、満ちた。

それでおれは笑った。

笑いながら、撃ち続けた。

そんなおれの背後を、残骸の中に横たわっていたため存在を感知できなかつた上司が、無言で通り過ぎて

いった。

午後二時だった。

あとがきと蛇足／

どうも、シナリオライターYです。

第二話をお届けします（ちなみに前のは外伝です）。

虚飾とは何を指しているのか。

破滅とは？

栄光とは？

予告した通りのサブタイですが、当時の意図がさっぱりわからぬです。

適当に合わせました。

あと大変申し訳ないのですが、当時の記憶がだいぶ曖昧になっておりまして、時系列的な並びとなつて

いるのかいまいち自信がありません。

が、作り話です。

合宿編が思いのほか長くなつたので、構成に変更を

かけております。

次は案外早めにお届けできるかも知れません。

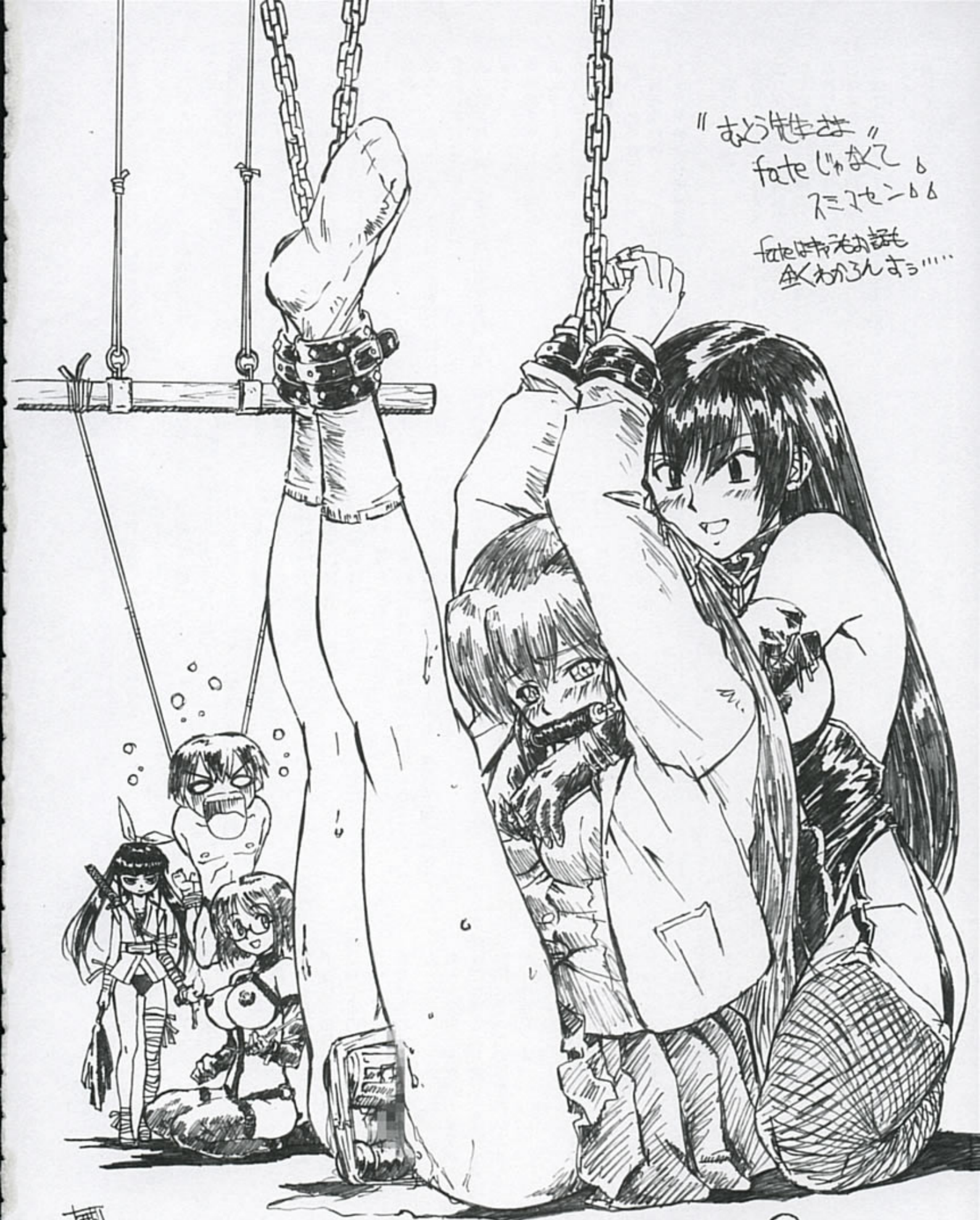
いわゆるひとつの〇〇〇〇〇〇〇〇編です。

ご精読ありがとうございます。

また次回。



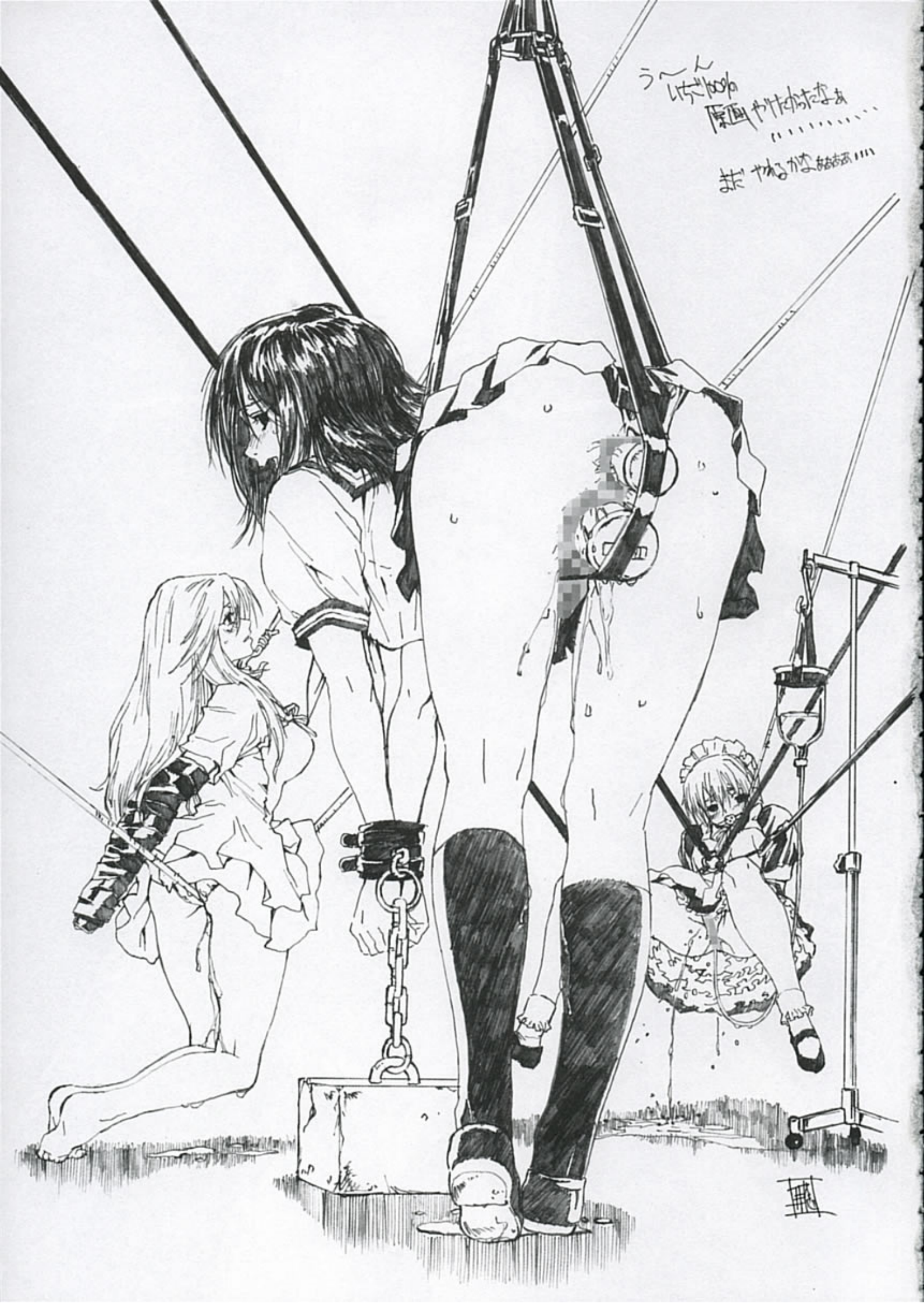
「おどけなま」  
fate (ハ) 女 (ニ) 〇  
不 (ニ) 地 (ニ) 〇 〇  
fate (ハ) 時 (ヲ) 刻 (ヲ) 記 (ス)  
全 (ク) 知 (ル) 事 (ヲ) 〇 〇 〇



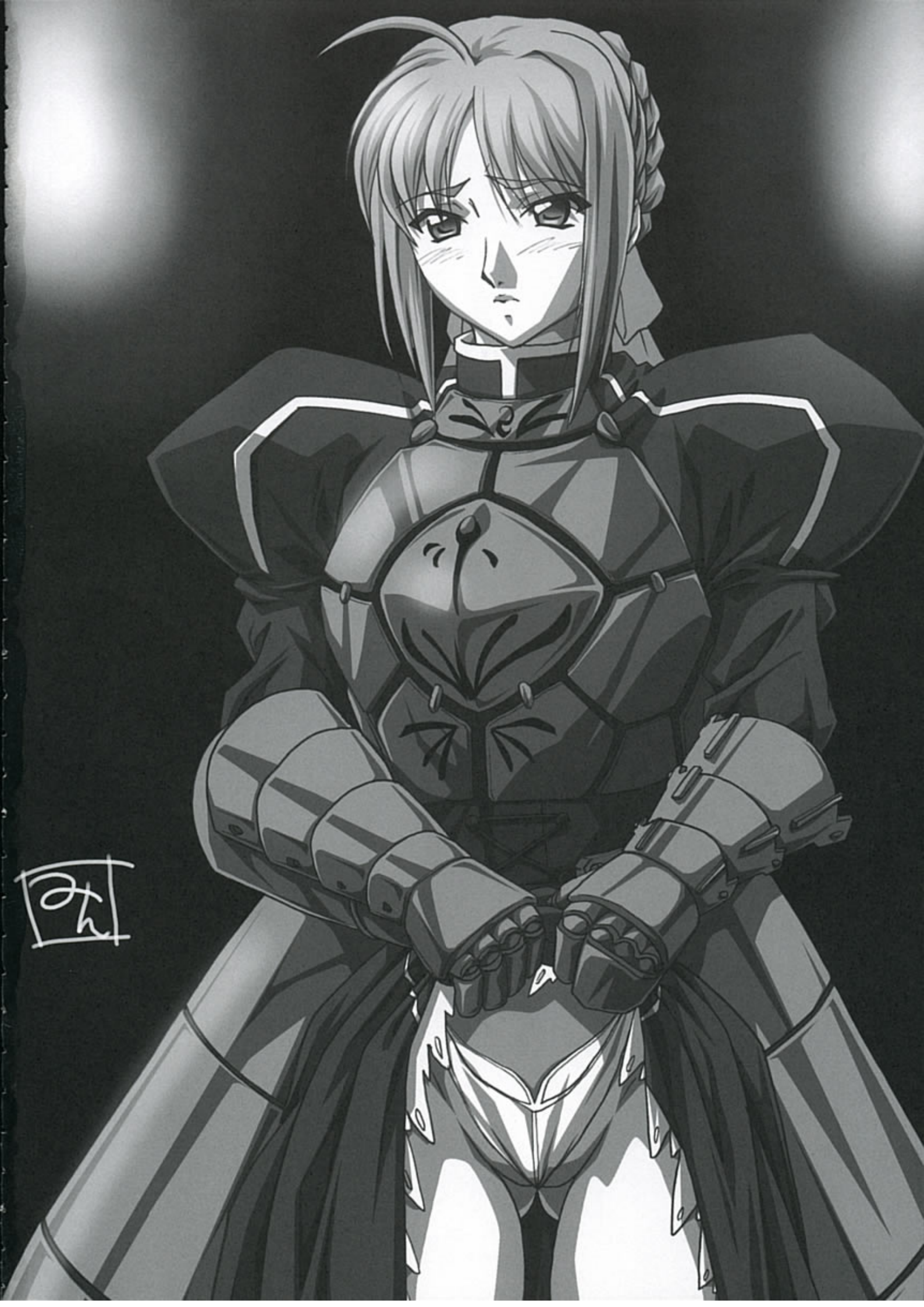
あーん

無

うん  
いざいざ  
原画やけおな  
.....  
まやがな結結



田



AK



## あとがき

お付き合いいただきましてありがとうございます。  
いかがだったでしょうか？  
心血注いでがんばったっす。  
おもちゃとか買いに行きたいのがまんして(w  
それはそれとして、これからも  
がんばっていろいろやって行きたいと思っていますので  
何卒よろしくです！  
さしあたって次のゲームに向かって突き進みます。  
これからもよろしく願いいたします。

むとうけいじ



## アストラルバウト Ver.9

発行 STUDIO TRIUMPH

著者 むとうけいじ

印刷 JC2

発行日 2005年8月14日

著者に無断で無断転写や無断掲載はおやめください。  
インターネットとかでの画像及び文章の転載や、やりとりするのも禁止。

STUDIO  
TRIUMPH



K-MITAH

D  
T